授業Ⅱ

道徳科学習指導案

６年３組　３３名　指導者　**藤谷　祐一郎**

本授業は，以下の検証を行うものである。
「自分シート」や「心の見える図」を用いて考えるようにすることは，子供が自分との関わりで捉え，自分の考えを広げたり深めたりする「深い学び」を実現するための手立てとして有効であったか。

１　主題名　　つながる感謝（教材名「この思いをロケットにのせて」〈読み物－鹿児島県の道徳〉）

２　ねらい

感謝の対象とのつながりを時間的・空間的に考える活動を通して，日々の生活が過去から多くの支え合いや助け合いで成り立っていることに気付き，そのことに感謝し，自分にできる行動につなげようとする態度を育てる。　（Ｂ　感謝）

３　主題について

(1)　ねらいとする道徳的価値について

本主題は，Ｂ「日々の生活が家族や過去からの多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し，それに応えること。」で，自分の日々の生活は多くの人々の支えがあることを考え，広く人々に尊敬と感謝の念をもつことに関する内容項目である。これは，中学年のＢ「家族など生活を支えてくれている人々や現在の生活を築いてくれた高齢者に，尊敬と感謝の気持ちをもって接すること。」からつながったもので，中学校のＢ「思いやりの心をもって人と接するとともに,家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し,進んでそれに応え，人間愛の精神を深めること。」へと発展するものである。

自分は人々に支えられ助けられて存在するという認識に立つとき，相互に尊敬や感謝の念が生まれてくる。それは，日々の生活，あるいは自分が存在することに対する感謝へと広がっていく。このことから,身近な人から見えないところで生活を支えてくれている人まで感謝の対象を広げ,自分も人々や公共のために役立とうとする心情や態度につながるように指導していく必要がある。そうすることで，互いに感謝し合える望ましい人間関係の構築につながっていく。

この期の子供は，自分が生活する社会全体の中で自他の関わりを見つめることができるようになる。しかし，自分の環境に不平や不満を抱きやすかったり，自分を支える人々の願いや努力に気付かなかったりすることで，感謝の念をもてないことがある。そうしたことから，過去から，人々が何を願い，何を残し伝えてきたのか，それは自分の生活とどのように関わり，支えられているのかに気付くことが大切である。そして，温かなつながりの中に自分の生活があることに感謝し，支え合い助け合おうとする人々の善意に応えて自分は何をすべきかを自覚し，進んで実践しようとする態度を身に付ける必要がある。

そこで，主題において，多くの支え合いや助け合いで成り立っている日々の生活，その温かなつながりの中で自分が生きていることに気付き，このことに感謝するだけでなく，感謝の気持ちを行動につなげようとする態度を育てることは大変意義あるものと考える。

(2)　全体計画（別葉）との関連

教　科　等	本　時	
○　国語科「未来がよりよくあるために」 自分の生活を見つめ，よりよい未来につなげて考える。 ○　家庭科「共に生きる生活」 地域の支え合いに気付き，生活の仕方を工夫する。	○　道徳科 つながる感謝 「この思いをロケットにのせて」	開校記念遠行 日常生活 集団登下校

(3)　子供の実態について　　平成３１年４月１７日　調査人数３３名　複数回答，( )は反応数

①　どんな人やどんなことに感謝しているか。なぜ，感謝しているのか。　【感謝の対象】
・母(33)･･･家のことをしてくれる。お世話してくれる。　・父(25)･･･仕事を頑張ってくれる。応援してくれる。 ・祖父，祖母（18）･･･物を買ってくれる。優しくしてくれる。　・友達(17)･･･遊んでくれる。仲良くしてくれる。 ・先生(13)･･･勉強を教えてくれる。みんなをまとめてくれる。　・兄弟(10)･･･教えてくれる。遊んでくれる。 ・監督，コーチ(8)･･･技術を教えてくれる。　・親戚(3)･･･お年玉をくれる。　・犬(3)･･･遊んでくれる。 ・給食技師(3)･･･おいしい給食を作ってくれる。　・テレビ，ゲーム(3)･･･情報をくれる。楽しませてくれる。 ・店，コンビニ(2)･･･物を売ってくれる。　・地球(2)･･･住む場所をくれる。　・病院(1)･･･病気を治してくれる。
②　感謝の気持ちを伝えることができたことがあるか。なぜ，伝えることができたのか。【できた経験】
ある（３０）　ない（０）　思い出せない（３）

・いつもお世話になっているから。(10)　・有り難かったから。(8)　・特別な日（母の日）だったから。(7) ・本当に感謝しているから。(6)　・本当に助かったから。(4)　・仲良くしたいから。(2)　・大変だったから。(1)
③　感謝の気持ちを伝えることができなかったことがあるか。なぜ，できなかったのか。【できなかった経験】
ある（２８）　　ない（０）　　思い出せない（５）
・はずかしい。(11)　・当たり前と思っていたから。(5)　・イライラしていたから。(5)　・面倒くさいから。(4) ・いつものことだから。(3)　・夢中だったから。(2)　・別にいいと思ったから。(1)　・急いでいたから。(1)
④　感謝の気持ちを伝えることは，なぜ大切か。　【意義】
＜自分にとって＞　・すっきりする。(13)　・いい気持ちになる。(5)　・笑顔が増える。(3)　・成長する。(2) ・後悔せずにすむ。(2)　・思ったことを言えるようになる。(1)　・またやりたくなる。(1) ＜相手にとって＞　・うれしくなる。(16)　・やってよかったと思える。(5)　・同じことをしようと思う。(4) ・やる気が出る。(2)　・仲が良くなる。(2)　・信頼がもてる。(2)　・いい気持ちになる。(1) ＜周りにとって＞　・平和で明るい，いい社会になる。(5)　・笑顔になる。(4)　・みんなもうれしくなる。(3) ・気持ちよく過ごせる。(1)　・笑顔があふれる。(1)　・人間関係がよくなる。(1)
⑤　感謝の気持ちを伝えるためには，どんな考えが大切か。　【心構え】
・相手の気持ちを考える。(10)　・相手の思いに気付く。(8)　・相手のことを考える。(5)　・素直になる。(3)

本学級の子供は，実態アンケート①より，感謝している対象が身近な人で，感謝している理由としては自分が何かしてもらっていることが多いことが分かる。②③より，感謝の気持ちを伝えることができた経験もできなかった経験もどちらもあることが分かる。できた理由は，お世話になっている,有り難いといった感謝の念から行動につながっている子供が多い。できない理由は，はずかしい気持ちや怠惰な気持ちが多い。しかし，中には，してもらって当たり前，いつものことだからと，自分が支えられていることに気付いていないと思われる子供もいる。④よりその意義については，自分にとってはすっきりした気持ちにつながる，相手がうれしくなると理解している子供が多いが，感謝の気持ちを伝えることが周りや社会にとってよい影響を与えることにあまり気付いていないことが分かる。さらに，⑤よりその心構えについては，相手の気持ちを考えることや相手の思いに気付くことを挙げているが，あまり見いだせていないことが分かる。

そこで,自分の生活が,過去から多くの支え合いや助け合いで成り立っていることに気付かせ，その人々への感謝の念を自分にできる行動につなげようとする態度を育てるようにしたい。

(4)　教材について

本教材は，ロケット基地のある内之浦を舞台に，自分を支える人々の関係性に気付き，感謝の気持ちが高まっていく主人公を題材としている。

ロケット打ち上げで盛り上がる内之浦の町に住む私は，先生から一枚の古い写真を見せてもらう。その昔の写真について婦人会の橋本さんに話を聞く中で，自分たちの生活が過去から現在にわたって，ロケット基地を支える町の人々と，町を活気付けてくれる基地の人たちに支えられていることを知るという内容である。

本教材は，写真が豊富に掲載されており，内之浦の昔と今を比較したり，内之浦の人々のロケット基地への思いを感じ取ったりできる。これらの写真を活用し，橋本さんの話を読むようにすることで，昔から築き上げてきた目には見えない感謝し合う関係に気付かせることができる。

４　指導に当たって

「見つめる」過程では,「自分シート」を基に感謝の気持ちを感じる対象を想起させ，対象の範囲を類型化しながら確認することで,身近な人には感謝していることに気付き,「自分の生活があるのは，身近な人以外に誰のおかげか。」という共通の問題意識をもつことができるようにする。

「問い直す」過程では，教材を読む前に，国産初の人工衛星「おおすみ」の写真を掲示し，何と名付けられたか確かめるようにする。その「おおすみ」と名付けられた理由を話し合うことを通して，基地の人たちと婦人会や町の人々の支え合い，助け合おうとする相互の関係について捉えることができるようにする。その際，昔や今の写真資料を示し，お互いの思いを支える背景について考えさせ，「その思いは今もあるのだろうか。」と問い掛けることで，昔から現在まで続く関係であることに気付くことができるようにする。さらに，主人公が抱いた「もし，この人たちがいなかったら。」という思いについて考える際,「もしいなかったら，実際はどうなっているか。」「思っているだけでよいのではないか。」と問い掛け，対話活動を行うことで，今の生活があること自体の有り難さや感謝の念を行動に移す大切さに気付くことができるようにする。

「振り返る」過程では,「心の見える図」を用いて，これまでの感謝の対象と比較しながら考えるようにすることで，自分との関わりで感謝の対象を広げたりその感謝の念を深めたりすることができるようにする。

「あたためる」過程では，まちづくりに貢献した地域の方から自分たちの町についての話を聞くことで，昔から多くの支え合い，助け合いで成り立っていることを実感し，感謝の気持ちをもち，自分にできる実践への意欲を高めることができるようにする。

5　本時の展開　　〔　〕子供の意識　○　指導の手立て　※評価

過程	時間	主な学習活動	指導の手立て
見つめる	5	1　日頃感謝していることを話し合い，本時のめあてをつかむ。 ・　家族が世話をしてくれている。 ・　友達が励ましてくれる。 感謝について深く考えよう。	○　「自分シート」を基に感謝の気持ちを感じる対象を想起させ，対象の範囲を類型化しながら確認することで，「自分の生活があるのは，身近な人以外に誰のおかげか。」という共通の問題意識をもつことができるようにする。
問い直す	２８	2　教材「この思いをロケットにのせて」を読んで考え，話し合う。 (1)　婦人会や町の人々，ロケット基地の人たちの思いについて話し合う。 【ロケット基地の人たちの思い】 ・　この地に基地をつくることができて，有り難い。 ・　町の人々からの協力がうれしい。 ・　この町でロケットを飛ばしたい。 【婦人会や町の人々の思い】 ・　内之浦を選んでくれた，糸川先生や基地の人の思いに応えたい。 ・　基地をつくるお手伝いをしたい。 ・　みんなでどうにか成功させたい。 【お互いの思い】 ・　協力して成功できたことへの喜び ・　昔から続く互いへの感謝の気持ち (2)　「もし，この人たちがいなかったら」と思った私の考えについて話し合う。 他者とつなぐ ・　この人たちのおかげで，今がある。 ・　協力したから，今があるのだ。 ・　自分にもできることがないかな。	○　教材を読む前に，国産初の人工衛星「おおすみ」の写真を掲示し，何と名付けられたか確かめるようにする。 ○　教材一読後，それぞれの感想を基にロケット基地の人たちや婦人会，町の人々の思いに焦点化して考えるようにする。 ○　「おおすみ」と名付けられた理由を話し合うことを通して，基地の人たちと婦人会や町の人々の支え合い，助け合おうとする相互の関係について捉えることができるようにする。 ○　昔や今の写真資料を示し，お互いの思いを支える背景について考えさせ，「その思いは今もあるのだろうか。」と問い掛けることで，昔から現在まで続く関係であることに気付くことができるようにする。 **○　「もし，この人たちがいなかったら，どうなっているか。」「思っているだけでよいのではないか。」と問い掛け，対話活動を行うことで，今の生活があること自体の有り難さや感謝の念を行動に移す大切さに気付くことができるようにする。**
振り返る	8	3　これまでの生活を振り返り，感謝することについて自分の考えをまとめる。 自分とつなぐ　生活とつなぐ ・　自分の生活は，昔の人の支え合いがあったから成り立っている。 ・　これまでの自分は，お世話になっている人にだけ感謝していた。これから，生活を支えてくれた多くの方々への感謝の気持ちは，あいさつで返したい。	**○　「見つめる」過程での感謝の対象と比較しながら「心の見える図」を用いて考えるようにすることで，自分との関わりで，感謝の対象を広げ，多面的・多角的に捉えることができるようにする。** ※　感謝の気持ちについて，身近な対象に寄せる見方から，時間的・空間的により広い対象に気付き，自分にできる行動につなげようという見方へ発展させることができたか。　（道徳ノート等）
あたためる	4	4　自分たちの町について地域の方から話を聞く。 ・　自分たちの町も，昔から多くの支え合いや助け合いがあったんだな。感謝の気持ちを行動で表したいな。	○　地域の方から話を聞くことで，昔から多くの支え合い，助け合いで成り立っていることを実感し，感謝の気持ちをもち，自分にできる実践への意欲を高めることができるようにする。